

## 東京特設中等教員養成所と貞秀寮

### ―戦時下の母子支援―

奥 田 環

#### はじめに

昭和14(1939)年7月、軍事保護院は文部省と協力して、戦没軍人・軍属の遺族(未亡人)のうち中等学校女教員を志す者のために特設教員養成所を開設することとし、東京女子高等師範学校に東京特設中等教員養成所が併設された。修業年限2年の同所家事裁縫科の試験に合格して、9月11日に入学した第1回生は32名で、昭和16(1941)年7月に修了した。昭和15(1940)年4月に入学した第2回生以後は「裁縫科」で、第7回生が昭和22(1947)年3月に修了するまで存続した。

『お茶の水女子大学百年史』(以下、『百年史』と略す。)では、この東京特設中等教員養成所設置に触れた箇所、「貞秀寮に子供をあずけて登校する東京特設中等教員養成所の生徒たち」というキャプションのついた写真が掲載されている。この写真には、「第一貞秀寮」との表札がかかった建物の入り口で、子どもや保姆の見送りを受けつつ、これから登校しようとする生徒たちの姿が写っている<sup>(注1)</sup>。

東京特設中等教員養成所の生徒は、戦況が悪化すると、昭和20(1945)年6月から長野県小県郡中塩田村(現在は上田市内)に疎開し、2年生は八木沢の法輪寺、1年生は舞田の法樹院に宿泊して、東京から交代で出張した東京女子高等師範学校家事科の教官の授業を受け、時には農作業を手伝ったり、託児所の世話をしたりした。戦争終結後も引き続き滞在して、2年生30名(第6回生)は昭和21(1946)年3月にここで修了し、1年生16名(第7回生)はその後東京に戻って、昭和22(1947)年3月に修了した<sup>(注2)</sup>。

また『百年史』の附属幼稚園の項では、附属幼稚園が戦時中の昭和19年(1944)9月から休園となり、「通園時間が十分以内の隣接区域の幼児や貞秀寮(戦争未亡人のための東京特設中等教員養成所裁縫科の宿舎)の幼児を受け入れて、臨時的保育が続けられたが、空襲が激しくなるにつれて、それらの園児たちもほとんど通園できなくなっていった。」と貞秀寮について触れられている<sup>(注3)</sup>。

東京特設中等教員養成所については、『百年史』で以上のような説明がなされており、これによりその開設から修了までのおおよそのことは理解できよう。しかし、ここで注目したいのは、掲載写真のキャプションに記された「貞秀寮」についてである。『百年史』では東京特設中等教員養成所について記述されているのは、上記のように、設置の記事、戦時中の疎開、附属幼稚園における言及の3箇所のみである。そもそも特設中等教員養成所は戦没者の寡婦をその対象としており、生徒たちの多くは子どもを抱えていた。同所は戦時下の母子支援事業の一環として設置されたのであり、子どもとともに入居できる寄宿舎と、託児所が用意されていた。それが、貞秀寮である。

現在に目を転じてみても、女性が社会に進出したり学業を続ける上で、託児・保育には大きな需要と課題がある。東京女子高等師範学校の後身であるお茶の水女子大学でも、平成13(2001)年11月に、大学院人間文化研究科棟に授乳室(ベビールーム)が設置され、乳幼児を連れた学生・教

職員の便宜をはかり、ついで平成 14 (2002) 年 10 月には、学生・教職員の子を預かるいずみ保育所が附属幼稚園内の一室を借りて開設されるに至る。そして平成 17 (2005) 年 3 月、いずみナースリーと名前を変えて新たな施設で新発足し、4 月からは大学附属学校部の中に位置付けられるようになった。このような流れのなかで、子どもを持った女性が子どもを預けて学業を修めるという視点や、当時における社会的意義からも、貞秀寮にはあらためて大きな興味を覚える。

本稿では、『百年史』では実態が明らかにされていない貞秀寮について、お茶の水女子大学に保管されている資料を用いて、より具体的な分析を行いたい。

なお、本文中で史料を引用する際には、旧字体は新字体に書き換えることとする。

## 1. 東京特設中等教員養成所の設置と寄宿舎の規定

軍事保護院は、軍事扶助法に基づいて、教化指導、出征者家族の援護、遺族援護（遺児の学費補助、遺族の職業補導など）、傷痍軍人の援護、帰郷軍人の援護などを実施した。そのうちの特設教員養成所の設置については、すでに逸見勝亮氏による「戦没者寡婦特設教員養成所の設立」および「戦没者寡婦特設教員養成所史 ―「戦争未亡人」へのまなざしと自立と―」において、詳しく検討されている<sup>(注4)</sup>。ここでは、軍事保護院が 3 種類の戦没者寡婦特設教員養成所（中等教員・小学校教員・幼稚園保母）を女子高等師範学校と女子師範学校に設置したことが、治安問題としての戦没者寡婦対策や戦没者寡婦に対する職業保障策の観点から考察されており、当時の特設教員養成所設置の実情が明らかにされている。

同論文ではすでに特設教員養成所に関し、母子共に入寮できる寄宿舎の存在について言及している。そこで『昭和十五年度 東京特設中等教員養成所一覧』（以下『一覧』）によって、東京女子高等師範学校に設けられた東京特設中等教員養成所の場合を具体的に見てみよう<sup>(注5)</sup>。

『一覧』では、「一 沿革略」の昭和 14 年項に、まず当所開設の経緯が掲載されている。

「七月十五日 軍事保護院訓令第一号ヲ以テ、東京女子高等師範学校内ニ、東京特設中等教員養成所家事裁縫科ヲ設ケラレ、八月九日東京女子高等師範学校長下村壽一本所長ニ任ゼラル。

九月一日 本所規則ヲ定ム。

同月十一日 開所式ヲ挙行シ、浅井か根よ外三十一名ニ対シ入所ヲ許可シ、其ノ翌日ヨリ授業ヲ開始ス。入所生ハ特設ノ寄宿舎貞秀寮ニ収容ス。

九月三十日 寄宿舎規程ヲ定ム。」

ここにすでに、「特設ノ寄宿舎貞秀寮」と、貞秀寮の存在が明記されている。

ついで、翌 15 年項には、

「四月十一日 安東久子外二十九名ニ対シ裁縫科ニ入所ヲ許可シ、其ノ翌日ヨリ授業ヲ開始ス。新入所生ハ在来ノ寄宿舎並ニ増設シタル寄宿舎第二貞秀寮ニ収容ス。」

とあって、第二貞秀寮が増設されたことがわかる。

次の「二 概要」では、目的・学科・終業年限・入所資格・学資・寄宿舎・終了後ノ特典・服務義務について説明がなされるが、そのうちの「寄宿舎」項には、

「生徒ハ総テ寄宿舎ニ入舎セシム。生徒ニシテ子女ヲ擁スルモノハ之ヲ共ニ入舎セシムルコトヲ得。

但シ東京市内又ハ其ノ付近ニ自宅又ハ父母ノ居宅アルトキハ通学ヲ許可スルコトアルヘシ。」

と書かれており、ここで貞秀寮が子女を同伴して入寮できる設備であったことがわかる。

「四 寄宿舎規程」においても、同様のことが、以下に見るように、各条に見られる。

「第一条 寄宿舎ハ本所ノ教育ト相俟テ学業ヲ自習シ德行ヲ磨励シ特ニ和衷協同ノ精神ヲ涵養シ兼テ団体生活ノ訓練ヲナス所トス。

第二条 生徒ハ総テ寄宿舎ニ入舎セシム。

但シ東京市内又ハ其ノ附近ニ自宅又ハ父母等ノ居宅アルトキハ通学ヲ許可スルコトアルヘシ。

第三条 生徒ニシテ子女ヲ擁スルモノハ之ヲ共ニ入舎セシムルコトヲ得。(以下略)」

そして「五 職員」項では、当時の職員数が61人であったことと、その氏名が記される。そのうち寄宿舎に関するものを取り上げると、「舎監 四」「保母 四」「嘱託 三」という人数が知られ、氏名の欄に

「舎監			原 シゲノ
			高田ミチヨ
	東京女子高等師範学校生徒主事		堀口きみこ
	東京女子高等師範学校助教授		大岩 金」
「保母			中島鈴子
			佐藤ハル
			杉江和歌子」
「嘱託	保育	東京女子高等師範学校保母兼教諭	及川ふみ
	家事		上遠野静子
	同		山本知子
	裁縫		小松光子」

と記されている。ここでは、保母に嘱託の及川も含めてその数を4名とし、そのため嘱託が3名と数えられているものと思われる。

ここに名前が挙げられた11名は、桜蔭会（旧東京女子高等師範学校、お茶の水女子大学の同窓会組織）の名簿<sup>(注6)</sup>によれば、ほとんどが当時の東京女子高等師範学校関係者であったことがわかる。舎監の原と高田は、それぞれ女子高等師範学校（東京女子高等師範学校の前身）の明治40（1907）年文科卒と明治34（1901）年高等師範科卒、堀口は女子高等師範学校明治40（1907）年理科卒で当時の東京女子高等師範学校の教官、大岩は東京女子高等師範学校大正10（1921）年家事科第1部卒で同じく教官、保母の中島と杉江がそれぞれ東京女子高等師範学校保育実習科の昭和14（1939）年卒と昭和15（1940）年卒、佐藤については不明、嘱託の及川は東京女子高等師範学校大正5（1916）年技芸科第2部卒でやはり教官である。また、上遠野については不明だが、山本は東京女子高等師範学校に併設された第六臨時教員養成所昭和14（1939）年家事裁縫科卒、小松は東京女子高等師範学校昭和14（1939）年家事科卒である。ここでは、当時の東京女子高等師範学校保育実習科を卒業したばかりの者が保母として採用されたのであろう。

『一覧』の「六 生徒」では、「生徒数」「志願者及入所者ノ推薦府県別調」「学歴調」「年齢調」「戦没者官等級調」「扶養子女数」と、生徒に関する細かいデータが載る。このうち、扶養する子女数については、当時在籍の家事裁縫科32名、裁縫科30名、計62名中、44名が1～3人の子女を擁していたことが知られる。

「七 寄宿舎」の項では、当時の寄宿舎の概要がより詳しく記載されている。

「寄宿舎ハ貞秀寮ト称シ、第一寮、第二寮ヨリ成ル。共ニ生徒収容ノ為メ恩賜財団軍人援護会東京府支部ニテ既設ノアパートヲ購入本所ニ貸附セラレタルモノナリ。外ニ保育室兼生徒集会室新築中ナリ。其ノ

位置及敷地建物ノ大略左ノ如シ。

第一寮

位置 東京市板橋区板橋九丁目一五九六番地

敷地 一〇八、七五坪

建物 木造二階建 和風瓦葺

建坪数一階五五、七四九坪 二階四九、四九九坪

延坪数 一〇五、二四八坪

室数 二十四室

第二寮

位置 東京市板橋区板橋九丁目一六〇二番地

敷地 一〇二、六八坪

建物 木造二階建 洋風セメント瓦葺

建坪数一階五六、三坪 二階五六、二六坪

延坪数 一一五、五五坪

室数 二十四室

一寮二寮共六疊四疊半ノ室ヨリナリ舎監室、事務室、食堂ノ外応接室、ミシン室、浴室等アリ。

保育室兼集会室（建築中）

位置 東京市板橋区板橋九丁目一六〇一番地

敷地 一二〇坪

建物 木造平家建 洋風瓦葺

建坪数 三〇、〇五坪

収容人員 現在収容セル生徒人員ハ五十二人ニシテ内単身入舎セルモノ四十一名子女同伴セルモノ十一名ナリ。入舎子女ハ十一組ニシテ、一組ハ一人乃至三人ナリ。其ノ人員ハ十七名ニシテ三歳ヨリ十二歳ニ至ル。内学齡未滿ノモノ十一名学齡以上ノモノ六名ナリ。之等ノ外三名ノ附添同伴入舎ス。」

そしてこれに続いて、「入舎生徒調」と「入舎子女調」として詳しい数字をあげた表が掲載されている。

最後に「八 生徒氏名」の表に、家事裁縫科第2学年、裁縫科第1学年、第3回入所者の3種の名簿が載り、それぞれの学年の生徒に関して、推薦府県名、戦没者官等級、氏名、年齢、出身学校、入舎か通学かの別、子女を同伴しているか留守宅に預けているかの別について、記載されている。

以上により、貞秀寮の具体像がかなり明確になった。すなわちこの時点で、和風の第一貞秀寮（写真1）と洋風の第二貞秀寮（写真2）が板橋区板橋（現在の板橋区大山）に存在し、さらに第二寮に隣接する保育室兼集会室が建築中であった。貞秀寮は恩賜財団軍人援護会東京府支部が既設のアパートを購入し、東京特設中等教員養成所に貸し付けていたことも判明した。恩賜財団軍人援護会は、軍事保護院の外郭団体である。また寮における子どもの保育には東京女子高等師範学校保育実習科の卒業生が保姆としてあたっていた。





(写真1) 第一貞秀寮



(写真2) 第二貞秀寮

## 2. 貞秀寮における生活と玉成舎

お茶の水女子大学には、東京特設中等教員養成所に関する資料が多く保管されている。具体的には、前章で引用した昭和15年度の『一覧』をはじめ、第1期生から第7期生までの手記、講義ノート、写真、アルバム、養成所について触れた新聞記事や雑誌などである。特に生徒の手記には当時の寮の舎監や保母、

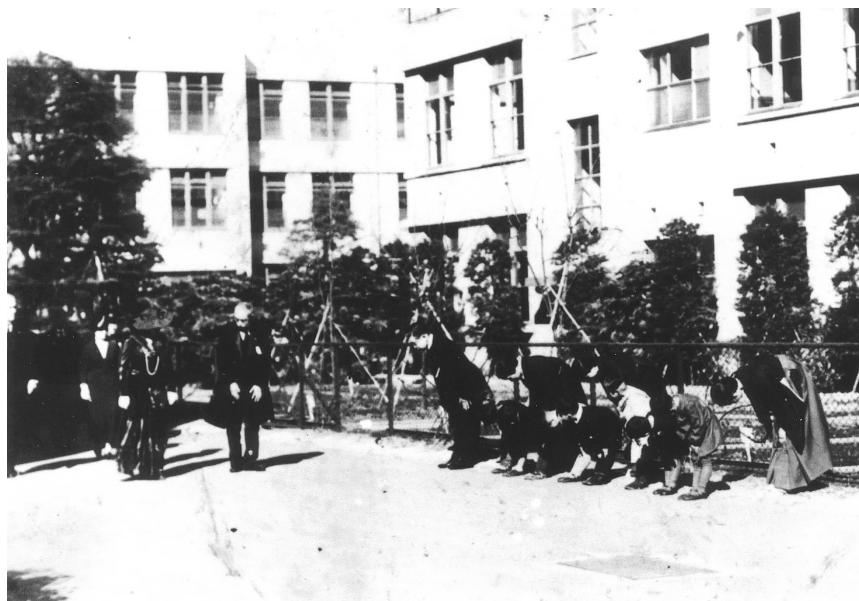
寮生たちの実名が記され、寮生活の具体像が浮かび上がる。またこの他にも、生徒の手記が婦人雑誌に掲載されたものを見出すことができた<sup>(注7)</sup>。

それらの資料のうち第2期生の記録（メモ書き）に、昭和16（1941）年に第三貞秀寮が加えられたことが書かれているものがある<sup>(注8)</sup>。第4期生の手記では幾人かが第三貞秀寮に居住していたことを述べているので<sup>(注9)</sup>、結局貞秀寮は第一・第二・第三の3寮があったことが判明する。

また第6期生の手記によれば、戦禍が増した昭和19（1944）年には、大山から大塚仲町（東京女子高等師範学校の近く）の、家人が疎開した後の松平家の屋敷を借りて一時的に貞秀寮が移転しており<sup>(注10)</sup>、さらに第7期生の寄贈した写真<sup>(注11)</sup>によれば、昭和20（1945）年には疎開先の舞田の法樹院で「東京特設中等教員養成所 舞田貞秀寮」の表札を掲げていたことがわかる。

次に『奮起の学校生活』（昭和15（1940）年12月）と『東京特設中等教員養成所 第一回卒業記念』（昭和16（1941）年7月）、『学校と寮』（昭和17（1942）年6月）の3冊のアルバムを利用して、貞秀寮での生活を写真で追ってみよう<sup>(注12)</sup>。

『奮起の学校生活』では、子どもとともに暮らす寮生活が垣間見られる。部屋に蚊帳を吊って中で眠る子どもの傍らで勉強に励む姿や、子どもを預けて登校する風景、休日の様子、修養会、「戦没者御命日」と書かれた戦没した夫の命日表、命日に揃って黙祷する姿、子どもたちの生活などの写真がある。また『東京特設中等教員養成所 第一回卒業記念』には、昭和15（1940）年12月3日の皇后（香淳）行啓の写真がある。この日は貞秀寮の遣児たちも東京女子高等師範学校に出向き、皇后を出迎えた。遣児8名が整列し、お辞儀をしている写真もある（写真3）。



（写真3）皇后行啓を迎える遣児たち

そして『学校と寮』では、玉成舎という建物の内外に集う子供たちの写真が多く見られ（写真4）、「玉成舎 生徒が同伴して参りました子供等は玉成舎といふ貞秀寮附属の幼稚園で母の留守中を安らかに楽しく見守られて過ごして居ります。」という説明がある。この「玉成舎」は、これまで『百年史』でも明ら



(写真4) 玉成舎

かにされてこなかったが、これこそ、第1章で保育室兼集会室として第二貞秀寮に隣接して建築中だった保育施設である。アルバムの玉成舎における幼児の生活、すなわち「遊戯、昼食、自由遊び、復習」などの写真から、玉成舎が保育室としての機能を果たしていたことがわかり、さらに生徒である母親たちが「自習、団欒、訓話」などを玉成舎内の一室で行っている写真から、そこが貞秀寮の集会室も兼ねていたこともわかる。「訓話」の写真の説明書きには「毎月第一土曜は全寮の生徒が玉成舎に集って修養会を開きます。舎監の訓話、或は名士の講演をきく等の外に自治的な修養研鑽の座談会もあってやがては日本の母たるべき女性を指導すべき重任を全うするための準備の修養につとめて居ります。」とある。玉成舎が成立して以降は、生徒の手記にもたびたび保育施設としての玉成舎に触れる記事がある。

昭和19(1944)年9月以降、東京女子高等師範学校附属幼稚園が貞秀寮の幼児を受け入れて、臨時的保育をしたことについても、幼稚園側の記録には「玉成舎（戦争未亡人のための東京特設中等教員養成所裁縫科の宿舎）の幼児を入園せしむること」とあるが<sup>(注13)</sup>、ここでようやく玉成舎が貞秀寮附属の保育施設であったことが明確になったのである。

また附属幼稚園資料<sup>(注14)</sup>のなかに、箱の側面に「常磐会寄附 積木 昭和十七年三月 玉成舎」と墨書された積木一式がある（写真5）。常磐会とは学習院女子部同窓会のことであり、そこから玉成舎の子どもたちのために寄贈されたものである。寄贈の経緯は定かではないが、戦没者寡婦に対する皇室の手厚い保護の一端を連想させるものがある。

なお、『東京特設中等教員養成所 第一回卒業記念』には「東条陸相夫人を迎えて」と題する、玉成舎門前での東条英機陸相夫人かつ子と寮生たちの記念撮影の写真がある。また第1期生の手記にも、ドイツ駐日大使夫人や東条夫人および学校関係者、陸軍関係者と玉成舎の子どもたちとの玉成舎玄関前における記念写真を貼付したものがある<sup>(注15)</sup>。これらの詳しい日時は特定しかねるものの、学校関係者や要人の貞秀寮視察や訪問があったことがうかがわれる。





(写真 5) 常磐会寄附の積木

### 3. 皇室との関係

『一覽』の「一 沿革略」の昭和 15 (1940) 年 3 月 7 日項には「皇后陛下ヨリ楓苗ヲ御下賜アラセラレ、之ヲ構内園芸甫場ニ仮移植ス。」とあり、また同年 4 月 27 日項に「皇后陛下ヨリ草花種子及ヒ球根御下賜アラセラレ、之ヲ構内園芸甫場ニ播種植込ミヲナス。」との記載があって、皇后から東京特設中等教員養成所に対し、楓の苗木と草花の種子や球根の下賜があったことがわかる。軍事保護院副総裁より東京特設中等教員養成所長に宛てた昭和 15 (1940) 年 3 月 7 日付軍事保護院発業第 40 号「御下賜楓苗伝達ニ関スル件」の書類<sup>(注 16)</sup>では、「今回 皇后陛下ニ於カセラレテハ軍事保護院所管諸施設ノ入所者ニ対シ御慰メノ 思召ヲ以テ楓苗ヲ下賜被為在候」とあるように、軍事保護院の所管であった東京特設中等教員養成所が楓苗下賜の対象となったのである。また同日軍事保護院に宛てた受領書によれば、下賜の楓苗は計 17 本であった<sup>(注 17)</sup>。楓苗は当日中に植樹された。その写真が「皇后陛下御下賜楓仮植式写真 第一号～第五号」としてお茶の水女子大学附属図書館に保管されている。下賜された楓苗や草花の咲きほころぶ写真は、アルバム『学校と寮』にも掲載され、「御下賜の楓と草花 さんさんと輝く陽光を浴びつゝ、みづみづしく繁る若葉の楓、色とりどりに咲き薫る草花の数々、これぞ過ぎし年慰めむすべもがなとの大御心に御下賜あらせられしものでございます。養成所生徒等は、いひ伝へ語り伝へては御恵みの忝さに只々感泣いたして居ります。」との説明がなされている。またこれらの下賜を受けて東京女子高等師範学校では早速に楓苗と草花の世話をする事務係を設置し<sup>(注 18)</sup>、生徒たちは交代制の当番で水遣りをした<sup>(注 19)</sup>。この楓はその後構内に移植されて、現在も 10 数本がお茶の水女子大学構内に残り、秋には美しい紅葉を見せてくれる (写真 6)。

第 2 章で言及したように、東京女子高等師範学校への皇后の行啓は昭和 15 (1940) 年 12 月 3 日であった<sup>(注 20)</sup>。その際には、東京特設中等教員養成所の生徒たちも整列して迎え、先に触れたように、特別に遣





(写真6) 楓の大木

児たちも出迎えに参加している。当日は、講堂での奉迎式に始まり、附属幼稚園、附属小学校、附属高等女学校、東京女子高等師範学校、東京特設中等教員養成所のそれぞれが、生徒作品の陳列や授業の公開を行い、グラウンドで体操および遊戯を披露した<sup>(注21)</sup>。

それに先立つ昭和14(1939)年10月9日、朝香宮鳩彦王が恩賜財団軍人援護会の総裁として、東京特設中等教員養成所を視察した。これは銃後援強化週間における軍事援護事業諸施設視察の一環として行われたものである<sup>(注22)</sup>。この時の写真がやはりお茶の水女子大学附属図書館に「朝香宮鳩彦王殿下東京特設中等教員養成所御成ノ写真」として保管されている。

また昭和16(1941)年7月10日の養成所第1回生卒業式の日には、北白川宮大妃房子、故永久王妃祥子が臨席した<sup>(注23)</sup>。同様に「北白川宮大妃殿下並妃殿下東京特設中等教員養成所御成ノ御写真」が保管されている。ちなみにこの卒業式には、本庄繁軍事保護院総裁、橋田邦彦文相、東条英機陸相夫妻も臨席している。

皇室関係者や政府首脳ともいえる人々が、東京特設中等教員養成所に対して手厚い保護や日配りをしたことは、とりもなおさず、戦時下の母子支援の主体が皇室や政府であったことを物語っている。

## 結びにかえて ―その後の貞秀寮―

東京特設中等教員養成所は昭和22(1947)年3月に第7回生の卒業をもってその歴史を閉じる。管轄していた軍事保護院はもともと厚生省の外局であったが、それに先立つ昭和20(1945)年3月に廃止されており、所管は厚生省に引き継がれていた。

養成所に貞秀寮を提供した恩賜財団軍人援護会東京府支部については、現在の社会福祉法人恩賜財団東京都同胞援護会のホームページの「沿革」の項に詳しい<sup>(注24)</sup>。それによると、昭和13(1938)年11月設立の恩賜財団軍人援護会と昭和20(1945)年4月設立の恩賜財団戦災援護会が合併し、昭和21(1946)

年3月に民生の安定と社会福祉の使命を担って恩賜財団同胞援護会が設立された。同時に恩賜財団同胞援護会東京都支部も誕生し、昭和22(1947)年10月に財団法人の認可を受け、ついで昭和24(1949)年10月現在の恩賜財団東京都同胞援護会と改称、昭和27(1952)年5月に社会福祉法人となって、現在に至っている。「沿革」の年表には、「昭和14年9月 東京市第1貞秀寮開設<板橋区大山町>(後の千川母子寮)」「昭和15年5月 東京市第2貞秀寮開設<板橋区大山町>(現サンライズ山中)」「昭和16年12月 東京市第3貞秀寮開設<板橋区大山町>(後の大山母子寮)」と、3つの貞秀寮の開設について記されている。これにより、貞秀寮は東京特設中等教員養成所の閉所後、一般の母子生活支援施設として利用され、市の建物を借りて戦争未亡人を援助していたことがわかる。その後、千川母子寮は昭和52(1977)年11月に、大山母子寮は昭和61(1986)年3月にそれぞれ廃止され、現在は、旧山中母子寮(現サンライズ山中)のみが残っている。

以上、本稿では、『百年史』で語りつくされなかった貞秀寮の実態について述べ、またこれまで特に触れられてこなかった貞秀寮の保育施設である玉成舎について、その存在を明らかにすることができ、さらに東京中等教員養成所に関する資料について言及しまとめることができたと思う。

生徒の入所にいたる背景には、それぞれ様々な事情がある。夫の死により婚家にいられなくなり、かといって実家にも戻れず、子どもをかかえたまま仕事を探さなければならなかった人もかなりいたことであろう。託児所付きの養成所が設置されたことの背景には、そのような戦時中の女性が置かれていた事情があったものと思われる。卒業生の手記にもたびたび述べられているように<sup>(注25)</sup>、夫を戦争で亡くした未亡人たちは、遺児とともに生活しつつ学業に専心し、教員の資格を得ることができた東京特設中等教員養成所と貞秀寮の存在に、多大な感謝の念を抱いている。ここに戦時下の母子支援策としての東京特設中等教員養成所と貞秀寮の社会的意義を見出すことができるのである。

## 【謝辞】

本稿を書くにあたり、お茶の水女子大学文教育学部教授鷹野光行先生には大変有益なご指導、ご教示をいただきました。ここに記して深く感謝する次第です。またお茶の水女子大学大学院生和田華子氏、矢越葉子氏には、さまざまなご助言とご協力を得ました。心より御礼申し上げます。

## 注

- (1) 「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会『お茶の水女子大学百年史』昭和59(1984)年5月、193—194頁。
- (2) 同書201頁。
- (3) 同書804頁。
- (4) 逸見勝亮「戦歿者寡婦特設教員養成所の設立」(『北海道大学教育学部紀要』第80号、北海道大学教育学部、平成12(2000)年3月)、同「戦歿者寡婦特設教員養成所史 —「戦争未亡人」へのまなざしと自立と—」(橋本紀子・逸見勝亮編『ジェンダーと教育の歴史』川島書店、平成15(2003)年5月)。
- (5) お茶の水女子大学附属図書館所蔵。なお『東京特設中等教員養成所一覧』は、管見の限りでは昭和15年度のものしか残っていない。
- (6) 社団法人桜蔭会『桜蔭会名簿』平成14(2002)年3月。
- (7) 友森タマエ「三人の子を抱へて中等教員に巣立つ軍国妻の手記『貞秀寮の二ヶ年』」(『婦人倶楽部』

昭和16年9月号、大日本雄弁会講談社、昭和16（1941）年9月）。なお友森タマエは第1期生である。

- (8) お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。
- (9) 『昭和五十五年四月 特設四期生のあゆみ（中間編集）』お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。
- (10) 手記「在学中の思い出」お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。
- (11) お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。
- (12) いずれもお茶の水女子大学附属図書館所蔵。『学校と寮』には、各写真の説明が記された冊子が添付されている。ただしこの3冊とも、第一・第二貞秀寮に関するものしか掲載されておらず、第三貞秀寮については記録が見られない。
- (13) お茶の水女子大学文教育学部附属幼稚園『年表 幼稚園百年史』国土社、昭和51（1976）年、58頁。
- (14) お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。
- (15) 手記「貞秀寮の子供達」お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。そこには、写真の説明として「昭和一五年春玉成舎新築後間もない頃外来者の方々と子供等の記念写真である。真新しい玉成舎の正門前である。学校関係では下村学長、事務の先生、陸軍当局の方々、独国の駐日大使館のオット大使夫人とお付添いの方々、陸軍大臣東条夫人、寮関係先生方六名、わずかな園児等の為に各方面の方々が保育の状態など参観下さったことは取りも直さず当時特設に対して心を用いて下さったことをありがたかった。」とある。
- (16) 『皇后陛下御下賜ノ楓ニ関スル資料』お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。
- (17) 前注（16）に同じ。
- (18) 昭和15（1940）年3月30日付『校報』（お茶の水女子大学附属図書館所蔵）第五百二十四号、「東京女子高等師範学校事務官 岡本三郎司 皇后陛下御下賜楓育成主任ヲ命ス（三月十五日）」、昭和15（1940）年5月11日付『校報』第五百二十五号「東京女子高等師範学校事務官 岡本三郎司 皇后陛下御下賜草花育成主任ヲ命ス（四月二十七日）」。
- (19) 第1期生手記（表題不明）による。お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。
- (20) 『都新聞』昭和15（1940）年12月4日朝刊「皇后陛下・東京女高師へ行啓、“教壇の未亡人”感涙、授業実習など五時間に亘り台覧」「光栄の遺児八名、畏し、列立奉拝を賜ふ」、『東京日日新聞』昭和15（1940）年12月4日夕刊「皇后陛下・女高師へ行啓、五時間にわたつて、授業を御巡覧、勇士未亡人光栄に感涙」、『讀賣新聞』昭和15（1940）年12月4日夕刊「皇后陛下女高師に行啓、学ぶ女性の栄光、再起いそしむ勇士未亡人感涙」、『國民新聞』昭和15（1940）年12月4日朝刊「畏し・興亜の遺児に、御慈愛深き御微笑、皇后陛下女高師へ行啓」。
- (21) 『昭和十五年十二月三日 授業の概要 東京女子高等師範学校・東京特設中等教員養成所』お茶の水女子大学附属図書館所蔵。
- (22) 『東京朝日新聞』昭和14（1939）年10月10日朝刊「畏し援護事業を御視察、秋雨煙るけふ朝香大將宮」、東京女子高等師範学校『昭和十四年日誌』（お茶の水女子大学大学資料委員会所蔵）10月9日条「朝香宮殿下特設中等教員養成所施設其他視察ノ為メ御巡覧被在セラル。」、昭和14（1939）年10月14日付『校報』第五百八号「朝香宮鳩彦王殿下御台臨 朝香宮鳩彦王殿下ニハ十月九日午前十一時十五分東京特設中等教員養成所御視察ノ為本校ニ御台臨アラセラレ学校長ニ拝謁ヲ賜ヒ東京特設中等教員養成所概況ニ付言上ヲ聞召サレテ東京特設中等教員養成所家事裁縫科生徒ノ授業（裁縫）ヲ御視察ノ上午前十一時三十五分御機嫌麗シク御帰還遊ハサレタリ」。

- (23) 『朝日新聞』昭和16（1941）年7月11日朝刊「胸に溢れる感激、未亡人卒業式、北白川宮兩殿下御成り、靖国の遺児にまで御仁慈」、前注（7）掲載友森タマエ手記「七月十日には、北白川宮大妃殿下と妃殿下台臨のもとに栄えの卒業式があり、女高師生徒も参列のうちに、特設養成所卒業生三十<sup>（ママ）</sup>一名に卒業証書が授与せられた。」
- (24) <http://www.douen.jp/>
- (25) 例えば、ある第1期生は手記「貞秀寮の子供達」で「修業年限は短縮して半分の二ヶ年、資格の免許は本科卒の方と同等と破格の恩典である。」「ふりかえれば二年間の寮生活、単身上京勉強の方に比べ子女をつれての生活は保育の上でずい分国からの経済援助を頂き真に感謝の外はない」と回想し、ある第4期生も手記「昔の一端を」（『昭和五十六年八月 特設四期生のあゆみ（第二集）』所収）で「お姑さんが『子ども（手記本文中では実名）は預るから…』とおつしやるのを、子どもをとられてしまう様な不安を感じて、何としても連れて行く事に決心して上京いたしました。学校そして貞秀寮では、あの当時として本当に親も子も、いたれりつくせりの待遇を受けました事を感謝いたします。」と記している。手記はいずれもお茶の水女子大学大学資料委員会所蔵。また前注（7）掲載友森タマエ手記でも、子どもを連れて入寮し勉強に励んだ貞秀寮での生活が具体的に記され、感謝の念が綴られている。